

Use of external and internal pelvic ultrasound
in the diagnosis of hind limb lameness
後肢跛行診断における骨盤の体表および経直腸による超音波検査

講演者：Dr. Florent DAVID

DVM, MS, Dipl. ACVS&ECVS, Dipl. ACVSMR, ECVDI Assoc.

Specialist in Equine Surgery, Sports Medicine and Diagnostic Imaging

Equine Veterinary Medical Center, Doha, Qatar

座長：栗本慎二郎（JRA 栗東トレーニング・センター）

競走馬や馬術競技馬における後肢の異常は、パフォーマンスにわずかな影響を与える程度の軽度の異常から患肢が負重できない程の重度の跛行まで様々である。そのようなプアパフォーマンスや後肢跛行の原因の一つとして骨盤の疾患がしばしば疑われ、そのような症例の診断においてはX線検査やシンチグラフィとともに超音波検査は極めて有用な検査法である。また、ポータブル型超音波検査機器を有していれば、馬を移動させることなく牧場や厩舎において大きなリスクを負うことなく実施することが可能であり、非常に簡便な検査法といえる。

骨盤の超音波検査において体表側から検査可能となる主な領域は、腸骨翼 (Iliac wing) および腸骨体 (Iliac shaft)、仙結節 (Tuber sacrale)、寛結節 (Tuber coxae)、坐骨結節 (Tuber ischii)、および股関節 (hip joint) であり、経直腸からは腰仙関節 (Lumbosacral joint)、仙腸関節 (Sacroiliac joint) 横突起関節 (Intertransverse joint)、および仙骨 (Sacrum) が検査可能となる。

これらの超音波検査においては、検査オペレーターの手技が重要であり、検査画像の読解が難しい症例も少なからず見受けられることから、検査画像の正確な解釈には十分な知識が必要となる。

このため、今年度のウマ科学会海外招待講演においては、画像診断のスペシャリストであり、Qatar の Equine Veterinary Medical Center で Senior Equine Surgeon を務める Dr. Florent Dabid を招聘し、骨盤の超音波検査法について講演していただく。

(栗本慎二郎 記)